

本

篇

無 對 光

終極究竟位始本合同
(大正九年二月清水實相寺講話筋書)

必至滅度願

一生補處願

一、如來性と衆生性との反對

絶對と相待 無限と有限

光明と闇黑との如く

質と量との反對

二、光明攝化の終局

始覺本覺に同ず

菩薩初發心より一生補處に至るの階級、新月より十四日夜の月、究竟位は滿月に例ふ、滿月は妙覺位、

彌陀の光明は日光に比すべく。

起信論の報身佛は菩薩業識の所現、菩薩の淨業益進むに随つて客體の報身彌廣大、十地等を經て正に妙覺に至る時は彼此の相なきに至る、是彼此の對比を絶するを無對となす。

聖淨對照

宗教的（客體に重きををく）

哲學的（主體を主とす）

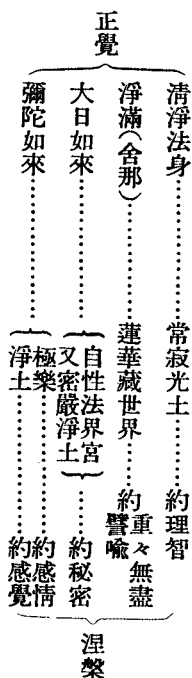
無量光

正覺

無量壽

涅槃

佛身佛土異方面



究竟位四涅槃

- 一、自性清淨（本覺彌陀無對當位）
- 二、有余依（依身を有して精神的極樂）
- 三、無余依（依身を脱して實在的）
- 四、無住所（生死に住せず涅槃に住せず常恆度生）

西方極樂の説

阿彌陀經に、從是西方、過十萬億佛土、有世界、名曰極樂、其土有佛、號阿彌陀、今現在說法、舍利弗、彼土何故、名爲極樂、其國衆生、無有衆苦、但受諸樂、故名極樂と。

西方極樂の説は、阿彌陀經のみにあらず、其餘の經に散在す。

天國と云ひ、西方と云ひ、宗教の萬行終局の歸趣する處、一方所一局部に局限せらるゝ如きものに非らず。畢竟如虛空、廣大無邊際なるは無論なれども、西方の説に就き、古來種々の解釋を試みる者あり。或は密教の暗號表示的に、東方を發心と爲し、西方を畢竟となす。故に大菩提心を起して究極する處、諸佛の涅槃界を西方とすと。是説は表示的に西方を解す。

或は諸佛の境界、本、絶對無有方所、本無方所に方所を立て、西方と曰ふ。隻手の音聲なきに隻手の音を聞けと云ふと同じく、絶對無方所の境界を體得せしむる公案なりと、是禪の公案的に西方を解す。

また或は一方、一心、一歸、一思惟、要する處、自己の歸依する、また心を一境に止めて散亂なからしむる方便なりとの解あり。

また或は一説に日の將さに沈み逝かんとする夕陽の光は、其光景實に美の天國をしのぼしむ。たとひ此土は薄闇と爲りゆくにも拘らず、彼の落日のもとに、常盤の光明界をしのぼしむ。直觀的に最も西方落日の下に我が故郷ありとの感想は、實に理屈ではなくして感想上入日の輝く方に常盤の光輝ある故郷をしのぶることである。されば宋の慈雲法師も落日の下に我故郷在りと。

是我等が永遠の涅槃界を瞻望するに、日中に太陽の眼上に在りし時に太陽の輝く下に永恆の光明界を觀するの、斯土の闇澹として冥々窈々たるに至るも、紫雲靄靄として麗日輝きて天鼓其赫々たる、（ ）其に東方の斯土が闇澹たるに反し、彼美天國は益々光輝を添ふ。斯れ人界と佛界との對照を直覺的に觀することを得。是は淨土を瞻望する直覺的の感想上、落日の下に常住の光明界を立つる說なり。

かく種々に説くべけれども、若し宗教發達の歴史より見れば、實に西方須摩提すまだいの説は、印度に於て遠きベーダの太古に於て、日の入る西の方に須摩提なる永恆に樂を享受すべき樂邦あり、我ら

が祖先の靈は今彼樂土に於て、七寶樹の花は常盤の春を匂はせ、八功德池の水は甘露の味を漲らす。我等もやがて祖先の靈と共にかの須摩提に到りて永恆樂を受くとの説は、釋尊已前數千年來、印度人が未來の天國諸の上善人の俱に會する處と信じ來りし傳説に外ならず。宗教は此人類の歴史と同じく精神的生活の人文的歴史にして、幼稚なる狀態より漸深に進化したるなり。さればたとい歴史の原始的に遡つて幼稚なる宗教なるも、進化の人文發達したる人に由つて進化す。

須摩提と涅槃

須摩提と涅槃とは一體の異名に外ならず。須摩提とは印度古來の傳説にして、未來の天國永恆不死の樂邦と信じ來りしや久し。されば印度人の傳來的信仰に、須摩提と云はゞ宇宙最幸福の美天國と彼等は信ぜり。其樂土は西方の落日の下に在りとおもひたりき。

後釋尊は會て生死の闇宅を壓ひ、常住の安穩所を求めんが爲めに、王宮を出て入山學道年を経て、竟に無明の眠生死の夢醒めて、正覺を生じたる時に、大涅槃常住平和なる境界現前す。

此涅槃界は、一切の煩惱染汚の滅したる處、常住の平和清淨安穩にして、自然の妙樂ありて大自在の境界、一切諸佛諸の煩惱の滅したる人の安住する處なり。釋尊が無明の夢醒めて、初めて發見したる無上の樂土、至高最徳で至幸福の靈境は即ち涅槃界である。釋尊の發見したる最幸の境界と、印度人の傳説の最幸福の須摩提とは、同體異名なり。涅槃界本諸佛正覺者の精神的に安住する處なれば、絶對的の靈界にして、已に分齊を離れ方所を超越す。

然るに釋尊は、絶對無方所の涅槃の靈界にすべての人類を歸趣せしめんが爲めに、古來の傳説の須摩提と、自己發見の涅槃界とを結びつけて、常住安穩の涅槃界を名づくるに須摩提と號け、宗教的信仰を以て、一切諸佛最正覺の中心本尊たる無量光如來に一心に歸命信順して、光明に攝取同化せらるゝ時は、無明闇黒の衆生も轉じて正覺の光と爲り、（ ）諸佛正覺を成じ、彼無量壽國に入りぬれば、自から生死を超へたる無量壽の涅槃界に安住することを得。諸佛絶對の靈界は即ち是西方の極樂なれば、衆生有相の見到住して、一ら西方安樂土をもとむるに、彼に入つて見れば即ち無方所の涅槃界また涅槃の莊嚴處々に満てり等の説甚だ多し。

能く宗教的眞理を悟達する人は涅槃と須摩提とは同體異名なることを明にす。然るに頑迷の輩實に

能く斯眞理を會せす。極樂は實に全く西方十萬億土のかしこに在りて、涅槃界は方所を離れたる諸佛の境界なりと。凡夫差別の見解を破らずして自ら諸佛平等の境界に會入すまことに善巧(せうく)の方便なり。

佛に約し機に約して

絶對的依正佛土(佛土觀)——衆生相待業感の世界依正を超えて絶對。

大涅槃——眞實佛土大涅槃界——相待生死を超絶し永恆常住の依處。

極樂

約佛——大涅槃界——畢竟如虛空廣大無邊。第一義妙境界。

約機——西方十萬億土。

一、一レ心、一レ方、一レ境、定ニ安レ心處。

二、感情上——日夕邊。

三、往昔從來傳説。(古來の傳説を依憑するは實地宗教上に缺くべからず)

四、神秘的。

極樂

佛智所照——無爲泥洹

凡夫所見——十萬億土

十八通(上九)云、淨土者第一義諦、妙境界相、次ニ於無爲泥洹之道一。

談義云、極樂は無爲泥洹之界、諸佛法王之家。

同曰、諸佛法無相泥洹爲ニ所期一。

須摩提と極樂と涅槃

須摩提、譯して極樂。又妙樂清泰等とす。一切世界中幸福之地なり。スマタイ日夕の方に永遠幸福の地あり、大慈(善)王之所領、彼處に清閑なる樹蔭に八功德池の甘露の水を汲て我等が祖先は居る、我等も彼處に到り祖先と幸福を共にせんと。

釋尊、無上道意を發し生死解脫の道を求め六年修行の結果無上道を覺りて無明を破る。生死を超え

て大涅槃を證し給ふ。涅槃は一切有爲を超越したる、時間空間を越えたる、絶對的永恒生命に、一切の相無く諸の作爲を離れたる處、一切妙色莊嚴四德莊嚴の處。

釋尊は淨佛國土を説くに、證者の爲には自己所照のまゝに淨土は去此不遠と説き、凡夫の爲には過於西方の彼岸と。甲は自己所見に本づき、乙は古來の傳説に依る。須摩提と涅槃と同體異名。

佛土の異名

如來の在す所を淨土と爲す。神國に例すべき種々の異名存するも、本來同一の涅槃界絶對の天心靈界、無量功德の莊嚴する處、實に不可思議無量の德を具備す。其見る處の方面に隨つて相を異にす。隨つて名稱も種々に表明す。

一、淨土。清淨國土、十八圓淨等、是感覺的に五妙境界。美天國とも名づく。如來成所作智の所現。

二、極樂。感情的に。佛土は常樂我淨四德莊嚴、妙樂圓滿の故に。

三、常寂光土。理智の所照、又如來大智慧の所現、故に理智不二、寂而照。

四、自性清淨涅槃。自性清淨、本煩惱生死なく、本自法然、大涅槃。之に迷て生死とす。之を發見するを佛と爲す。是禪家の所見佛土。生死涅槃如昨夢。衆生と佛とは本來一體。

所求の佛土

極樂無爲泥洹之界、諸佛法王之家、超方域、絕邊際、時間空間相待に規定せらるゝ迷の凡夫衆生を誘ふに指方立相終局目的の歸處を標し、西方十萬億とす。

是法藏比丘酬因感果の報土、四十八願莊嚴淨土。

一々誓願爲衆生、是爲物身の佛身佛土なれば。

他力實體は本絕對眞如盡虛空、絕對的大心靈體。

此絕對の眞如中に、佛は四智圓照して已に無明の眠醒めたる光明界淨法界の方面に在り。衆生は如來大光明中に在りながら、無明に翳せられて八識の現境を實感し、現に天地日月星辰山河大地悉く是

八識の所現。

是凡夫八識の所感。

淨土はミダ、

淨土と穢土

宇宙實體は即如來の法體、宇宙は本來絶對的大靈態即ち眞如である。如來絶對本體の中に自ら二現相と爲る。光明と闇黒の二方面。甲は如來四智の所現相。乙は凡夫八識の所感である。甲を淨法界と云ひ、乙を染法界。又淨土と穢土等の種々名を以て區別せらる。甲は日中の如く、乙は夜の如く、宇宙に二體あるに非ず。甲は報佛の所感、乙は凡夫の業感。自己業感のあらや現境を捨て、彌陀淨業の四智の方面に轉する時は、凡夫の闇黒より眼明て如來四智の淨界が現前す。

十八通廿一、悟は從本自迷是常他故從穢土他國還歸淨土本國

心○は三世諸佛法界衆生無二無別。但彌陀曠劫行道悟我等心○成清淨依果即第一義諦妙境界相淨土。

我ら今修淨業ニ超入ニ淨土ニ合會ニ彌陀清淨依果、即入ニ一法句、極樂入ニ一法句ニ云、さながら我ら本有悟なり。

三不成

一、質不成

執淨穢不二、若爾ば失俗諦恒沙法無量諸佛願行淨土穢土出世利生是○○也

二、異質不成

執淨穢隔別永異處、背眞諦平等一理恒沙諸佛平等一法身

三、無質不成

共に非す上無淨土下無穢土、若爾ば六凡四聖因果撥無即、違諸佛說法常依二諦不壞假名而說實相此是盲漢也。

當宗の意は、是業力所隔、諸佛所構、雖在當處、非如一質、(四智所見と八識所感)十萬億刹非レ如

異質^二（智と識との所感は異なれども實體本質は同一なり）

雖非一非異、不會墮無質執、直生當處極樂、而不_レ壞_二十萬億程_一、十萬億程雖_レ遙、生_二當處極樂_一、況諸佛願行、常同常別、古今法爾なるをや、何況彌陀教門、即相無相、見生無生、佛意所構出、搜玄即冥也。

如來不思議の法

經——十萬億

論——如虛空無邊

淨土有邊無邊經論相違

淨土の體と相

淨土判釋

最高等に進化せる宗教の判釋によれば、宗教的精神界には、娑婆即淨土にして、精神已に彌陀に歸

し彌陀の生命に入る時は、此身を脱せずして觀念的に彌陀の中に安立す。

天然の現象界にして感覺世界の外に未だ最高等なる觀念世界に入らざる限りは、彌陀の淨土の中に存しつゝ天然意象の皮殻に覆染せられて、自ら高遠なる彼岸に空望するは、宗教意識未だ發達せざりし爲に致す所にして、是我淨土教の宗義の低（　）が故にしかるにあらず。

觀經の去此不遠とは娑婆即淨土の義なり。是精神宗教なればなり。

若し精神にして其意象を超越するにあらずれば、たとへ十萬億のみならず百萬億を超ゆとも、淨域實現すべき理あることなし。

是自中存在即ち彌陀の中の現宇宙界なればなり。阿彌は是絶對の實在なればなり。唯自己の天然意象を超て、（彌陀の實在に入らずして）、十方法界何れの處か彌陀界にあらずる處かあらん、是佛教が具存教なればなり。觀經の淨土の莊嚴依正二報の莊嚴に於て、人の宗教意識の機能彌陀に致一せば、一切の處に於て實現せることを説たまへり。導師は觀經所説の淨土及び彌陀を以て報土と釋せり。然れば知りぬ、自己の心機致一せば、十方世界悉く淨土なることを、是最とも高等なる宗教の判教なり。

感覺世界は是穢土に非ず。而れども此感覺世界は絶對なる彌陀の實體の中なることを記すべし。意象に於て淨穢永く隔り、處に於て内外あることなし。若しからざれば彌陀は是絶對無限にあらざればなり。觀經、是心作佛、是心是佛。是淨土教は精神宗教にして具存一體教の證なり。

龍樹の涅槃とは滅度。一切の煩惱を滅盡して生死海を度脱するの義なり。中論に「受諸因緣故、輪轉生死海、不受諸因緣、是名爲涅槃」

世間虛妄相に執着する煩惱を滅盡して、眞實相の全顯するを涅槃、即ち本來の實相に復したるを涅槃と云。

中論に涅槃實際及與世間際、如是二際、無有毫釐分別。

佛身及佛土

如來の方より云はゞ如來自境界、永恒本然の本覺。主體即ち人の方よりは宗教終局目的に歸入すべ

き無爲涅槃界、主體客體全々一致したる處、本覺始覺合體せし處、或は神の國、また天樂園と名けられ、或は清淨國土、自性身寂光土、また自性天真佛、また十佛自境界等の種々の名を以て表明せらる。世界生滅轉變を超えたる、絶對無規定にして、眞實、常住、安樂、自由、清淨の靈界。

また至眞、至善、至美の眞理の靈界、最高等にして眞神の在ます處とも云ふべく、釋迦牟尼佛無上菩提を得て證入し給ひし處、即ち涅槃界なり。一切諸佛は此の實體より出で一切衆生最終目的として歸する處。

涅槃界に對する觀念

神及び神の國に對する觀念は、宗教意識の程度に隨つて、神の國即ち涅槃の觀念また階級なき能はず。自然教の如きは、幼稚なる意識なるが故に、神の國の觀念隨つて賤劣なり。自然物素の中に神を求む、自然科學唯物論者器械的世界觀の觀念には、自然以上の高等の神國を要求せず、彼等は自然界に肉の幸福を最終の希望とす。

超自然教には、自然界は生滅轉變極りなし、常住の安穩は得て望むべからず。宗教意識が最終目的として希望する處は、世界を超越したる神の國即ち涅槃界とす。彼處は常住安樂、光榮と幸福に充さるゝ處、或は世界を超越したる天國と云ふ。または西方十萬億土と名づく。此等は生滅の世界と不生滅の涅槃界とを空間的に超然たるものとす。また一方には生死の現世界と、常住の涅槃界とは、方處の彼此に拘はらず、凡夫の迷によりて生死を受く。若し煩惱滅する時は即ちこゝに在りて涅槃を證す。然れども凡夫が生死を滅して涅槃を得んには、無限の時間を超ゆるにあらざれば。三祇劫を超えたる彼處に於て涅槃を證すと。或は時間的に、或は空間的に、生滅の世界と涅槃界神の國とは其體質を異にするものと觀す。

高等に進みたる圓教にては、生死即涅槃、煩惱即菩提として、生滅轉變の現世界と不生滅の涅槃界とは、空間的にも時間的にも別々なるものにあらず。娑婆即寂光土にして、本より涅槃界。即ち如來の清淨土は絶對無限にして、何の處か之に出でたる所ぞ。如來の寂光土の中にあつて、凡夫は自ら生死の世界と觀す。衆生の生死の世界を即如來は極樂淨土の無盡の莊嚴と見る。心迷ふ時は生死の世界悟る時は即涅槃界、如來の絶對無規定の靈界の中に衆生は相待規定の束縛を感ず。極樂は無爲涅槃

界、本然清淨にして如來の境なれば、何ぞ方域あらん。

故に淨土論に、觀彼世界相、勝過三界道、畢竟如虛空、廣大無邊際とあり。然るに經に過十萬億の方域を立つるは暫く隨機説のみ。記主師曰く、方域を立つるは約機説、無方域無邊際とは佛及證者に約しての説なりと。

如來の本土は絶對ならば云何かして現自然界と障碍せざるや。曰く、吾人が經驗せる自然界は意志に實現せられたる客觀的觀念にして、本質が絶對觀念態なれば、自然現象の自中存在なることを妨げず。故に吾人迷妄の夢醒覺し來つて觀すれば、如來一大觀念中に幻現せる世界なることを觀知す。吾人の經驗せる自然界に生滅轉變究りなく、本體の觀念界は、常住不變にして一切の約束を受けず。絶對心靈界に萬德の莊嚴なるは、是高等なる宗教意識が要求する終局目的に歸すべき涅槃界なりとす。

重ねて佛教の涅槃の觀念

宗教の終局目的に歸する處は、意識の程度に隨つて涅槃界に對する觀念もまた階級的に其を異に

す。暫く二三を擧ぐるれば、小乗教の如きは説く、今此身心は苦空無常無我なり、之を厭捨し、無我の觀をもて、煩惱を斷じ、諸の業を止息し、而して我空眞如を證得し、乃至羅漢果を得て、灰身滅智身心等一切滅したる處に、涅槃界顯現す。此の身心を厭捨し偏眞の無爲に歸するを終局目的とす。

法相家には、世界一切萬物は各自の第八識アラヤ識を以て根本とす。アラヤが變じて、此の身も心も世界も現す。主觀も客觀も同じくアラヤ識の所現にして、識を離れて實我也實法もなし。若し人煩惱所知の二障を斷盡せんが爲めに、三祇の劫に萬行を修し、最後の一念に佛果を得る時、八識は轉じて四智となり、二轉妙果、三身圓滿を證す。清淨法界は是自性身を體とし、四智の相は自受用身、四智と不生不滅の清淨法界とを合して、如來五淨三身の相あり。涅槃に本來自性清淨涅槃と有餘と無餘と無住處とあり。

智の故に生死に住せず。大悲の故に涅槃に住せず。常寂にして妙用無碍、未來際を盡して有情を利す。斯教の如きは、生滅の世界と涅槃界とは體性を別とするが故に超然教なり。

圓教にて、天台には土に四土を立て、即ち凡聖同居土、方便化土、眞實報土、常寂光土これにして前の三土は機類に應じて觀する世界、常寂光土は唯佛の境界、是如來の自境界、常樂我淨の四德をも

て莊嚴し、寂にして常に照し、理智冥合せる處に如來清淨法身在ます。

本來如來の寂光土の中に在つて、衆生は自ら生死の苦界を觀ず。諸佛の菩提を衆生は自ら煩惱として迷惑す。生死轉する時は即ち涅槃、煩惱の自性を知れば即ち菩提の光なり。

華嚴によれば、眞如自性を守らず隨緣して生死の海衆生界に流轉す。生死を出で、因分は普賢境界重々無盡の理を證し、果分十佛自境界、密迹入玄、成佛涅槃の相、如來自證の境界は證者自ら知るのみ。

華嚴三昧に證入してより、如來の境界は四法界、重々無盡、事々無碍、蓮華藏界、所有塵、一々塵々入法界。

密家によらば、全宇宙は大日心王の覺體、塵數の諸聖は心數の眷屬、五智所成の依正二報は本有金剛界。

涅槃界の異名

如來本覺、自性天真、諸佛自境界、また眞如、法性、第一義諦、如來藏性、涅槃、本覺等の名を以て心靈界を表明す。

如來本居の涅槃界は本一體なれども、種々の方面より之を觀じこれを表明するに名詞も從て多種なり。

常寂光土——理智に約す。

極樂——感情に約す、

淨土——感覺に約す。

無爲涅槃——意志に約す。

無量光明土又は智土——智の具象的表明。

自性天真——理性。

密嚴土——神秘的。

蓮華藏界——譬喻的。

神の國涅槃界を或は抽象的、又は具體的、又感情智力等の諸方面より觀する又多種なり。例へば同

じ日光に對する感覺に視官には光明態、觸覺には熱態なるが如し。

常寂光土、如來本居自境、娑婆に即して即寂光。

不在内、不在外、不在中間、超空間、絶時間、離一切相即一切法、離故無相、即故無不相、即如來本自境、非寂、非照、復寂にして常照、照而恒寂、故名常寂光土、また清淨法身と名づく。身土不二、本始不二。

涅槃界は理想態とし、觀念的に表明して寂光土と名づく。永恒本自寂靜にして、虚徹靈明、唯大智慧光明あるのみ。永恒常寂は理性、昭々曜々たるは慧知、心靈の光明即ち清淨法身にして、而も寂光土。故に心身土不二なり。是の如き身土は無始無終、非成非壞、本自永恒自存の心靈態、即ち如來自性なり。

清淨法身居常寂光土とは、即ち身土不二の體なり。是の如きの境界は、佛陀の自ら證入する所、即ち阿彌の自體。一切衆生は無明に翳られて之を見知すること能はず。盲者の日光を見ざるが如し。一大觀念中にある世界たることを知らず。

衆生は但肉眼をもて自然界のみを見る。若し佛眼開く時は此土即常寂土なるを見知すべし。法華に

我不見如三界見三界。また如實知三界相とあり。三界とは自然界。如實知見は靈界、一は肉眼所見にして、他は佛眼所照なり。

佛及び證者は娑婆に即して寂光を見る。寂光如來境智を融じ、而も常寂昭々、法身を體とし、應身を用とし、數多無量の化身を發現して衆生を度して無窮。衆生既に成佛する時は本始不二、十方三世諸佛本體を一にし、三身一如、境智不二なるを寂光如來と名く。

極樂及佛身

寂光土を感情的に表明して極樂世界と名く。又最幸の國とも云ふ。靈界は因果の束縛を離れ、自然の規定を超えたり。生滅轉變の患ひなく、彼我分別の隔てなく、機制我と世界の約束を離れたる心靈の生命は、眞我に融合し、無碍自在、永恒不變、眞理に隨順し、法性に相應し、四德莊嚴の國には自然微妙の樂のみあり。無爲涅槃の域には、光榮と幸福とのみ充てり。樂園無爲の春ながく、逍遙極りなき處、歡喜は無限の泉源より湧出し、自然の妙樂は法界と共に盡くることなし。

經に彼佛國土は清淨安穩にして微妙快樂なり。無爲泥洹の道に次げり。諸の聲聞菩薩天人智慧高明に神通洞達し威な同じく一類にして形異狀なし。餘方に因順するが故に天人の名あり。顏貌端正にして、世に超えて希有、容色微妙にして、天に非ず人にあらず、みな自然虛無の身無極の體をうけたりと。

極樂はたゞに如來の實體の上に冥合したるのみならず、如來の不可思議の妙用たる成所作智と妙觀察智との感應によりて、衆生の心靈と如來の内容と融合し、自然に微妙の快樂を感じしむ

極樂は如來の内容をすべての心靈に冥合して、感應の中に起す所の妙樂なれば、寂光土は本體を表し、極樂は妙用を表はす。前者は如來の形式理性致一にして、後者は内容の融合の状態なり。起信に如來は本第一義諦なれども、大用をもて衆生の見聞に隨つて種々の快樂莊嚴を起すとは是なり。如來の妙用の所發とし、人の感情的信仰の對象としては、如來の涅槃界を吾人目的の歸處たる極樂界と名づく。

清淨土又は美天國

寂光土即ち極樂を如來成所作智の現はす處とし、また衆生の感覺の對象として、淨土又は美天國と

名づく。

聖典によりて其の相を示さば、如來國土は自然の七寶を以て地と爲す。恢廓曠蕩にして限極すべからず。悉く相雜廁し、轉相入間し、光赫焜耀にして、微妙奇麗なり。清淨莊嚴十方一切世界に超踰せり。衆寶の中の精たるものなり。又曰く、一切萬物、嚴淨光麗、形色殊勝に、妙を極め美を盡せり。能く稱量することなし。

又曰く、衆寶蓮華世界に周徧せり。一々寶華に百千億の葉あり。其の花の光明無量雜色にして、青色には青光あり、白色には白光あり、玄黃朱紫の光色も亦然り。暉暉煥爛にして明曜なること日月の如し。一々の華の中より三十六百千億の光を出し、一々に三十六百千億の佛を出す。身紫金にして相好殊特なり。一々の諸佛また百千の光明を放ちて、普く十方の爲めに微妙の法を説き給ふ。是の如き諸佛各無量の衆生を佛の正道に安立せしめ給ふ。

又聖典に、如來其中に於て、六十萬億の身に八萬の相好を具足し給ふを現じて、光明遍く十方の世界を照し、常に念佛の衆生を攝し給ふと。

諸の法身の菩薩は雲の月を籠むが如くに圍繞し、如來相好圓滿の身を現じて爲めに法を説き給ふ。

是の如く感覺的莊嚴の相は、皆是感覺心象にして、肉眼の所對にあらず。本より如來の涅槃界は淨土本來寂光土、何ぞ感覺の相あらん。答へて、如來の大本體本質の方からは唯一大觀念態なるも、大用現象たる成所作智によりて、諸の感覺的莊嚴を現するなり。

藕益師云く、寂光若し勝妙の五塵なくんば、何ぞ夫れ聲聞の偏眞に異ならんと。本より淨土の五塵は物質的感覚にあらずして感覺心象なり。即ち肉眼の對象にあらずして心眼の所照なり。

起信に、諸佛法身色相を離る、云何ぞ、能く色相を現する。

答へて曰く、即此法身是色體なるが故に能く色を現す。所謂本より已來、色心不二なり。色性即智なるを以ての故に、色體無形、説いて智身と名く。智性即色なるを以ての故に、説いて法身一切處に徧すと名づく。所現の色分齊あることなし。心に隨つて能く十方世界、無量菩薩、無量報身、無量の莊嚴を示す。各々差別皆分齊なく、而相妨げず。此心識分別の能く知る所にあらず。眞如自在の用の義なるを以ての故にと。

記に、所現の色中に、彼の眞心無碍にして周徧の故に、所現の色亦圓融無碍。乃至、一々諸根皆法界に徧し、然も互に相妨げず、此眞の用。妄識の能く知る所にあらず。

宇宙の本體寂光土なるは大圓鏡智の體なり。五塵の妙莊嚴は成所作智の用。如來法身法界に周徧するが故に作智周徧す。故に一切の處に清淨國土を現す。

涅槃界

如來の清淨土を涅槃界と云ふ。

如來の境界は相待因果生滅の規定を離れ、絶對無規定、本有の實相の體は造作のえてする處にあらず。

世界が因果に規定せられ、生死轉變極りなきに反して、如來の本土は不生不滅、永恒常然。

涅槃經に曰く、解脱とは虚無即如來なり。如來は虚無、作所作にあらず。眞解脱とは不生不滅なり。是の故に解脱は如來なり。不生不滅、不老不死、不破不壞にして、有爲の法にあらず。之を如來入大涅槃と云ふ。又解脱とは無上と名づく。阿耨菩提を得し已つて無愛無癡即解脱なり。又如來とは即是涅槃、涅槃は即無盡、無盡は即是佛性、佛性は即是決定、決定は即是阿耨菩提。又如來者即是

無爲、無爲者卽是常、常者卽法、

又曰く、道に二種あり、一者常、二者無常。涅槃亦爾り。外道及凡夫聲聞等の道を無常とす。諸佛菩薩所有の菩提を常と爲す。善男子菩提と涅槃とは悉く名けて常と爲す。一切衆生は無量煩惱の爲に覆はれて、慧眼なきが故に見ること能はず。諸の衆生戒定慧を修して、修行の故に道と菩提と及涅槃とを見る。是を菩薩が菩提涅槃を得ると名づく。道の性相實に生滅せず。道は色像の見るべきなしと雖も、而も實に用あり。衆生心も見るべからざるも亦有なるが如し。又曰く、大樂あるが故に大涅槃と名づく。涅槃の性無苦無樂の故に大樂と云ふ。凡夫の樂は無常敗壞、是故無樂。諸佛常樂、無有變易、故名大樂。二者、大寂靜の故に、名爲大樂。涅槃の性は大寂靜、一切憤鬧の法を遠離するが故に。三者、一切智の故に大樂と名づく。一切智にあらざるは大樂と名けず。四者、身不壞故、名づけて大樂と爲す。身若し壞すべくんば樂と名けず。如來の身は金剛不壞。煩惱身無常身に非ず。故に大涅槃と名く。

又曰く、第一義諦を亦道と名づく、亦菩提と名づく、又涅槃と名づく。又云、法身は卽是常樂我淨なり。若しは佛出世及不出世にも、常住不動にして、變易あることなし。

涅槃は不生不滅なりと云ふも、單に凝固無生の非活動の體なりと云ふにあらず。

密嚴淨土

如來の眞佛土涅槃界を神秘的に密嚴淨土と名づく。眞佛身土をば自然界を超絶したる彼岸に求むべからず。宇宙全體物心二界を總合して即ち是れ金胎不二の大日覺王の體なり。

六大を佛體とし、四曼を相とす。三密を用とす。六大の中に於て地水火風空の五大は理體にして胎藏界。識大は智にして金剛界とす。六大合して理智一如の大日如來。宇宙萬有六大を離れず、六大は諸法に周徧の故に、一切法として大日に非ざるはなし。理智共に法界に周徧し、理胎藏に四重聖衆、智金剛界に三十七尊、兩部本來不二なり。

大日心王の覺體、塵數の諸聖は心數の眷屬、五智所成の依正二報、本有金剛界（體性智）自在三摩耶（妙觀察智）大曼陀羅より現諸法不生（平等性智）大菩提心（大圓鏡智）不壞金剛光明心殿（成所作智）不壞金剛諸尊常住身を嘆ずる光明心（心の覺體を嘆ず）殿（所住）。

三十七尊九會曼陀、十三大會、四重曼荼、重々帝網、塵刹聖衆（正報）、依正無盡、自在圓滿。

此の教によれば、宇宙は本はれ密嚴淨土一切諸法として覺王境界ならざるはなし。一切衆生萬德具備して衆生として、毘盧ならざるはなし。

表徳門には十心諸法平等にして、是大日の表現の故に、一塵も捨つべきなし、皆是れ毘盧。一切萬法悉く大日。眞如即我身、佛法即我體。

宇宙萬有悉く毘盧表徳、衆生悉く本有の薩埵なれども、衆生無明に覆はれて自ら覺知せず、宇宙は深秘の蓮華藏界なれども、衆生は煩惱に覆はれて覺知すること能はず。故に密嚴と云ふ。若し三密相應の寶鑰を以て神秘の門を開くときは、法界本來是れ大日の表徳たるを知らん。宇宙實相たる大日を觀んと欲せば、他に求むべからず、自己心靈開發すべし。然る時は永恒本然の大日輪は恒沙無邊の萬德を具して、永しなへに自己內在の法界を照すを見ん。

大日の淨土の中に在りて、凡夫は生死の闇宅を認め、衆生生死界中に在りて、如來は密嚴淨土に住し給ふ。

汎神論は、吾人は神の一分子また神の一模塑なりとす。神は宇宙全體の人格的存在とし、之を人格

に擬す。人の精神の最高要素とし人間の精神を極大とし神を寫象す。さればとて無限なる神と有限なる人と全然同一なりと云ふにあらず。

金胎五智等を以て表號的に人格に擬したる神の觀念に外ならず。かゝる表號的擬人論は宗教には避くべからざる事なり。

顯教は、學理的に宇宙全一の精神を認め、智によりて即ち推理によりて、全一の觀念に達して、神は全一の精神ならざるべからずとするも、云はゞ理に於てまた觀念に於て、之を知るも、全く如來の内容との融合は、神秘的瑜伽の密法によらざるべからず。即ち内容が三密相應し、入我々入、神秘的加持によりて、生ける大我と融合し、活ける靈として生活するに至る。

如實に自己の根底たる大日の心靈を知見し、之と融合すれば即ち無上菩提なり、即大日如來なり、重々帝網即疾顯。

眞如遠からず此の身を捨て何の處にか求めん。如實に自心を知れば即自己の心靈大日尊、即法界周徧の體、即ち密嚴世界なり。

宇宙は本大日の表徳たるも、衆生は無明に覆はれて、如來の自性と相應ぜざるが故に、自ら生死に

迷没す。宇宙は本大日なれども、迷へる衆生の爲めには如來の自性は超絶的なり。汎神論は如來の自中存在にして、而も超絶的なり。如來は無限に絶對無規定。世界は相對規定なり。自然界は如來の中に没入す。如來は世界に没すべきに非ず、故に自然界は生滅變易。眞善なるものにあらず。吾人は如來を離れ心性にあらざる故に神の顯現なりと。

吾人は生滅變易を見るも、如來は本有永恒の大日如來なり。生滅變易は游（遊）三昧の所作なり。如來の妙觀察智と之と相應せる神秘的宗教とによりて如來の本體を觀じたるものとす。

重々無礙　蓮華藏界

華嚴經の涅槃及佛身。

如來は十佛自境界。

十身如來、重々無盡、蓮華藏界に住す。

宇宙萬有を總合して之を佛身とし、之を融三世間の十身とす。衆生身、國土身、業報身、聲聞身、

獨覺身、菩薩身、如來身、智身、法身、虛空身

衆生と國土と業報との三は衆生の業感、これを染分とし、聲聞と獨覺と菩薩と如來智法の六を淨分とし、虛空は圓融無碍身。

本來萬有即如來の自體なれども、衆生は自ら迷ひて之を知らず。又菩薩身等の十身如來身を、更に十種に分ちて、十身十佛とす。菩薩、願、加持、化、意生、威勢、相好、福德、智、法、これを十身と云ふ。成正覺、願、住持、涅槃佛、隨樂、心、業報、三昧、本性、法界之を十佛と云ふ。十身を三身に配當すべし。

十佛を立て無盡を顯はす。

宇宙全體本如來本體、之を二面とし、一方は因分、普賢境界、法界緣起、乃至自在無窮、法界體性、本來自爾、緣起無窮、始終を離れ、諸法の體性、衆善の朝宗、萬德の歸所なる甚深法界、是如來の重々無盡、圓融無碍の活動せる方面にて、一面は果分、唯佛自境界、果分內證圓融、相即相入、圓融無碍、是如來本質自性、如來自ら證入し給ふ所、即自受用身と相應す。是絶對無規定即ち超絶體なり。因分一切無盡の活動、果分自中存在。

如來は一方には本然自存毘盧、一面には無始無終に宇宙萬有に在て活動す。

蓮華藏界、如來遍法界身、一面より觀すれば種々雜多なる世界塵數刹海なり。一方よりみれば圓融無碍、究竟果分國土海、十佛自體、絕對無碍。理事無碍、體と力と相即相入し、一々塵々法界に偏し、一塵一切塵刹と相即相入し、一切塵々重々無盡、其狀相説くべからず。一塵稱法界なれば、一塵に盡法界の塵刹を相容し、相即門には一即一切、一即一切、圓融無碍、舉一全收、法性圓融故、因果相即、生佛一如、生に即して佛、初發心時便成正覺。相容門には、十方無盡の依正色心は一塵に相容し、一に多を容れ、多に一を容れ、乃至重々無盡の用をなす。

時間的には三世際を以て一念に相入し、一念即無量劫。一方に無限の時間と、一面には非時間的の同時態。十佛如來自境界は絕對永恒心靈態、言語道斷、如來自證。

一方には塵數の相好身を以て重々無盡の刹海に於て常然に說法度生無盡。

經に、一佛土を十方界に滿、十方を一に入、亦無餘、世界本相不壞。又曰く於一微塵中、現無量佛國。又一毛孔皆有無量菩薩、各爲具說普賢行願。又云、一微塵所呈現、一切微塵亦如是。

本經に説く處の佛身及佛土論は、宇宙心王如來を佛眼を以て觀じたる相なり。また佛身を妙觀察智

を正面として觀ぜる相なり。

涅槃及佛身論

涅槃とは、眞如緣起論には、始覺の智極りて本覺と一致したる處、生滅の相と根本無明を滅盡し、眞如全體顯現したる處。

如來は絕對心靈、大智慧光明の相、恒沙無盡の性徳を具して、また不可思議の業用を現じて、十方三世に衆生を度す。

眞如の體は絕對なれども、衆生の心に應じて佛陀報應二身を示し。涅槃は無明煩惱の滅盡して、眞如の實際に復したる處。佛陀は眞如の用をもて法報應の三身とす。

佛身土の觀念の三階級

初め天然教。二超然教。三圓具教。

天然教は幼稚なる宗教意識即ち原始的宗教思想。即天然の人には神の觀念未だ幼稚にして神を天然現象の中に求め天然物素と一なりとし深奥の理想なく宇宙現象の中に自然的意思あるが如くも未だ明瞭ならず。

自然科学唯物論者の如く盲目的器械的世界觀は劣等なる意識と云はざる可からず。天然的人は現在の苦惱を免れんが爲に神に對する願望は有形感覺を超ゆるなく、神も有形世界に。解脱また然り。神の觀念に於ても劣等なり。

次に超然教には宇宙現象界は幻夢の如くにして、眞實なるものに非ず。相對規定なる世界及び人生は身心土を斷滅せる遠き彼岸に、眞實の涅槃界在り。現在の感覺界を超絶せる彼岸とす。甲は空間的に高妙なる天にあり、また十萬億土に超えたりとす。乙は時間的に三祇の後に始めて靈界現前す

と。或は百劫或は死後に始めて到るとの超然主義は現象界と靈界とは全く宇宙の體を異にするものとす。

進みたる圓滿の宗教は宇宙本來如來の眞身上にして絶對無限の如來の身土を離れて世界一物も有るなし。不可思議にして、如來の體内に在れども、衆生は自ら迷ひて本を背にし末に向つて眞相を知る事なし。如來は無始已來無始無終に、遍空間遍時間、不可思議の靈態にして、消極即ち遮情としては絶對無限、言語道斷、十佛自境界、果分不可説と。表徳としては、深祕的に盡十方無碍光如來、圓融無碍の靈性より重々無盡、眞徳の故に十方面に無盡の靈象を現じ無盡の靈能を以て以て一切を度す。宇宙は感覺より見れば物質的自明の世界體なるも、觀念的に自觀せば如來の境界、至眞至善至美の眞理の靈界にして、如來不可思議の自境界なり。

天然教には感覺界已上を未だ意識せず。超然教には現象界と靈界とを其體別々なるものとす。發達せる宗教には、絶對の實體が自觀の眞相と、現象假相との異見にして、其本體の別なるに非ず。本來の眞面目と生理機械的現象忘想の所見との異相なり。

圓教が靈界の方面即ち如來の身土を詞を以て表するに種々の名あり。

小 乘 教

今此身心及び身、受、心、法、共に不淨、苦、無常、無我なり。之を厭捨し身心の煩惱を斷じ無我の觀智を以て貪瞋等を斷じ諸の業を止息し、我空眞如を證得し、乃至羅漢果を得て灰身滅智、方に諸苦を滅す。之を涅槃と稱す。此五蘊の泡露を厭ひて偏眞無爲に歸す之を最終の歸處とす。斯教は個人解脱の消極の方のみに滯つて未だ夫れ已上の理を識らず。

法 相

法相家に依らば、宇宙の現象界は是自己第八阿賴耶識の所現なり。識所變より自己の五根となり、感覺より六塵の世界顯はれ國土及び宇宙が現象せしなり。皆自己の識が所現なれば識の外に其實法あるに非ず。實に在らざる幻物を實有の我及び萬物と執するは、喻へば熱を患ふ人の夢に異色の人を見るに非ず。

るが如く、こは患力の故に感ずるものにて、實に人ありと謂ひし我身も唯識の變現する處なりと。宇宙現象界は幻夢にして實に非ず。若し人五位の修行に進趣窮盡して、煩惱と所智の二障を滅盡せんが爲に三祇百劫萬行を修して、最後の一念に佛果を得る時、八識が轉じて四智と成り、二轉妙果三身圓滿に寂々照々として朗かなり。

清淨法界は是自性身、四智の相は是如來自ら受用する相、平等性智所現の身は佗受用身、成所作智所現の身は變化身たり、妙觀察智は是說法斷疑の智なり。

四智と不生不滅清淨法界の體とを合して如來五淨三身の相とす。涅槃に本來自性清淨涅槃と無住處涅槃とあり、無住處涅槃とは大悲智慧常に輔翼、此に由て生死涅槃に住せず、有情を利益し、未來際を窮め、用にして常に寂、故に涅槃と名づく。此教は感覺界は八識所變にして假象なり。八識轉する時は、四智、二轉依、菩提涅槃を顯現す。修によつて現するも、佛界本來の理を説かず、また超然主義にして、三祇の時間を超え。感覺は妄にして涅槃は眞實、其體を異にすと。

天台

天台には四土を立て凡聖同居土、方便化土、眞實報土、常寂光土。前三土は機感相應して感ずる處、常寂光土のみ唯佛の安住する淨土。是れ機を離れ唯佛の自境。卽ち是れ四德波羅密を以て莊嚴し周遍。寂にして常に照す、理智冥合、是法身の住處なり。

永恒常然、本自寂靜、照々玲然の淨土には自然の妙樂あり、自在無碍にして清淨なる處、唯佛境界、眞理と、一切慧と一切能との德のみあつて充滿す、之を常寂光土を名づく。

寂光土は寂に卽して能く照す、照にして寂、身に卽して心なり、心に卽して土。身心土不二にして二、二にして不二。是の如きの甚深境は言語に超え、心行所滅、相待を絶したる絕對眞如なれば、常識を以て測るべからず、とは遮情の分にして、また感覺的に表明すること能はざればなり。法華經に如來自己の知見する神祕の内面を洩して、法華經には、是の如くに説き給ひたり。我三界の如くに三界を見ず。また、我如實に三界の相を知見すと。然らば常寂光淨土は眞空寂寞、（澹々）なるか。曰く

然らず。如來自受用の妙境は、無明覆える衆生の爲には神祕的なるも、如來は是無明の夜明けて白日青天宇宙の眞象を見る。我淨土は毀たず、衆生劫盡きて大火に焚かるゝ時も、我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり。園林諸堂閣種々寶莊嚴。又、如來慧光照すること無量なり。壽命無數劫。柔和質直なる者は常に我身此に至て說法するを見る。本來佛壽長遠、久遠實成の本佛は常に寂光土に在て摩訶毘盧遮那如來と號す。

三界の如くにとは天然感覺界を云ふ。如來の方面は眞實の靈界にして即ち觀念界なり。宇宙實體の内面に清淨國土ありて光明赫耀暉燁煥爛にして言ふべからず。如實に觀修して佛智に相應する時即ち觀することを得べし。

隋の智者大師法華三昧に入つて、靈山一會未散なるを感ず。本來絶對靈界、何の處に於てか觀ぜざるべけん。單に衆生無明に翳せられて自ら見ざるのみ。

衆生は三昧の心窓を開きて如來の靈界を觀ず。終局に歸入する時は即ち常寂光土の毘盧遮那に歸入す。

寂光の如來は境智を融して、而も常寂照々、法身を體とし、應化の身を發現して、未來際を盡して

衆生を度せん。應身は感覺界に示現す。三世十方諸佛是なり。三世十方諸佛も内面を觀すれば即ち一體本佛なり。

華嚴

華嚴によらば、諸法無自性、また因分は普賢の境界なれば、重々無盡の理を盡して談じ得べきも、果分は如來十佛の自境界なれば、甚深玄妙にして説くべきにあらず。感覺界の相對的の情識に墮せんことを畏れて。無明に翳せらるゝ時は如來の眞境も凡夫の境に俗化すべきこと、喻へば赤眼鏡を以て見る時は物として赤色を呈せざるは無きが如しと。

如來自境界は甚深々々、華嚴三昧の眼を以て暫らく如來の眞境界をのぞき見んか、宇宙森羅萬象悉皆毘盧の果徳、浩々たり。衆相俱に是佛の妙象なり。宇宙を盡して皆蓮華藏世界。一切の塵々相互に重々無盡に蓮華藏世界を映現す。本來は如來圓融無碍の靈徳の顯現たる塵々なればなり。

天然の感覺は、明を失ひ闇に迷ひ、眞を脊にして塵に向ふ。眞理を知らず。

實に法界緣起。宇宙萬象は唯是一大心靈の開發なり。萬物一として關聯せざるものなし。相對する萬有は互に相關係するものにして、萬有の多々、單獨孤立たるに非ず。悉く内面不可割に關聯するなれば、萬物同體にして、表面に差別の相を呈す。差別即ち平等なれば、事々無碍論起る。

宇宙は、凡夫の感覺には生滅變易無量差別の相をなすも、如來は蓮華藏世界に毘盧遮那如來ましまして、蓮華藏界、一々の塵々相互に映徹して無碍なるを見る。

佛に十身あり。衆生身、國土身、業報身、聲聞身、緣覺身、菩薩身、佛身、智身、法身、虚空身、等一切諸法として佛法に非ざるなし。宇宙萬物として佛體ならざるなし。萬德莊嚴して包攝無窮なり。

一心靈が差別の萬物なれば、相互に主となり伴となり、一法を主とせば餘は擧げて伴と爲る。爰に於て主伴圓融論となる。

是果海圓融の相、一多無碍、九世を攝して一念に入る。如來正覺を成する時一切衆生悉く成佛す。念劫融即、圓融無碍の佛眼より觀ずれば、情非情として佛ならざるはなし。是如來自證の方面を表はしたる相なり。

眞言

眞言家は秘密教、即ち神秘的に如來の内證を本とし、感覺の現象を末とし、現象界の教理は顯教の分齊にして、如來自證の内面を説明するは獨り密教のみ。凡夫は無明により、本を捨て末に轉じ、本來毘盧遮那如來の中に在り乍ら、自己の無明に秘せられて如來の眞境界を知見すること能はず。如來之を秘するに非ず衆生自ら煩惱に陰覆せらるゝのみ。

秘藏寶鑰に、爾時毘盧遮那世尊入於一切如來一體速疾力三昧說自證法界體性三昧言我覺本不生出過語言道諸過得解脫遠離於因緣知空等虛空如實相智生已離一切暗第一實無垢。

意は天然的相對的規定を超えて、所謂の絕對本覺、即ち父母未生前の本覺の自體本爾の故自性の理が顯現したる處。言語にも超えて、すべての凡夫の迷及び一切の罪惡が脱却して、相待の相互の規定因果律を離れて、自性天真の虛高く、萬象の眞面目發露し、絕對無碍の第一義天に、常住不變の大日輪は永恒自存の光明を耀々として照すも、感覺には、凡夫の眼は翳せられて知見すること能はず。天

然の意識を超えて心眼開發して、清淨無垢となりて、眞相顯はる。

然らば如來の深秘の内面はいかがにてあらん。

宇宙の眞相なる大日輪を觀ぜんと欲せば須らく自己の心窓を開くべし。靈窓開ける所に、永恒の大日輪が光を發つて、其富饒なる玄妙なる世界を見せしむべし。

寶鑰に曰眞言行者いかに修してか無上菩提を證するぞ。當知、法爾に普賢大菩提心に住すべし。一切衆生は本有の薩埵なれども、貪瞋痴の煩惱に縛せらるゝ故に、諸佛の大悲善巧智を以て此甚深の秘密論伽を説いて、修行者をして内心の中に日月輪を觀ぜしむ。此觀を作す故に、本心を照覺するに、湛然清淨なること猶滿月の光が虚空に遍して分別する所無きが如し。亦無覺了と名づけ、亦淨法界と名づく、亦實相般若波羅蜜海と名け、能く種々無量の珍寶三摩地を含むこと猶滿月の潔白分明なるが如し。

何とならば一切有情は悉く普賢の心を含めり。我自心を見るに形月輪の如し。何故に月輪を以て喩となすかとならば、曰く、滿月圓明體は即ち菩提心と相類せり。凡そ月輪に一十六分あり。瑜伽中の金剛薩埵より金剛拳に至るまで十六大菩薩者あるに喩ふ。

三十七尊の中に於て五方の佛位に各一智を表はす。東方阿閼佛、大圓鏡智を成するに由て亦金剛智と名づく。南方寶生佛、平等性智を成するに由つて亦灌頂智と名づく。西方の阿彌陀佛、妙觀察智を成するに由て亦蓮華智と名け又輪轉法輪智と名づく。北方不空成就佛、成所作智を成するに由て亦羯磨智と名づく。中央の毘盧遮那佛は法界智を成するに由て本と爲す。

已上の四佛より四波羅蜜菩薩を出生す。四菩薩とは即ち金寶法華なり。三世一切の聖賢生成養育の母なり。是に於て印成せる法界體性の中より四佛を流出す。四方如來に各四菩薩を攝し十六菩薩と爲す。三十七尊の中に於て五佛四波羅蜜及び後の四攝八供養を除いて、但十六大菩薩の四方の佛の所攝のみを取る。

眞言

大日如來心王の覺體塵數諸聖は心數の眷屬。五智所成の依正二報は本有金剛界體性智。自在大三摩耶妙觀察智、大は大曼陀、三摩耶曼陀。覺現諸法本初不生平等性智。大菩提心大圓鏡智。不壞金剛、（諸尊常住身を嘆ず）光明心（心の覺體を嘆ず）殿（は所住）

三十七尊、九會曼荼、十三大會、四重曼荼、重々帝網、塵刹聖衆、依正無盡、自在圓滿
 蜜嚴華藏、塵數諸尊、森羅而住、一切衆生萬德妙用歷然として具故に、一切衆生皆毘盧遮那なり、
 一切諸法悉是覺王境界。

六大を佛體と爲、四曼を相とす、三蜜を用とす。六大の前五大は理、第六は智。之を金胎とす。六
 大即大日如來。一切諸法六大を離れず。六大法性、性周徧諸法故、一切諸法として大日に非ること無
 く、大日法界に周徧す。

理智共に大日。理、胎藏、四重聖衆。智、金剛界、三十七尊、兩部不二、爲理智冥合。

森然諸相宛爾たる諸法、皆是眞如即大日

表德門には十心諸法、平等にしては大日の表德、故一塵も不棄、皆是盧舍那。

一切諸法、是大日眞如、即我身、佛法即吾體。

本願寺派

本願寺派には佛に二種法身あり。一に法性法身二に方便法身となり。阿彌陀佛、法性法身としては、自性本然にして、周徧法界の實體にして、本來是佛、何ぞ修證を藉らん。是また久遠實成の如來、十方三世諸佛の本佛。

方便法身とは法性に背き顛側し無始已來生死に流轉し自ら出離すること能はざる衆生の爲に、法爾の本佛が方便法身を發現し、開明の光を與へんが爲に、五劫思惟永劫、法藏の跡を垂れ、六八の弘願を建て、願は悉く衆生の爲にす。苦難徧に衆生をして心門を開きて如來の室に入らしめんが爲に、本願成就し、因圓果滿、十劫正覺を無碍光如來と號す。これ衆生の爲に法性法身より方便法身を發現したる十劫始成、本佛と冥合して一體不二なり。暫く衆生を攝取の爲に慈悲の手を垂れて方便法身を現したるも、正覺の心開きて見れば本佛と別なるに非ず、之を盡十方無碍光如來と號したてまつる。

眞佛土とは、佛とは即ち是不可思議光如來なり。土は亦是無量光明土なり。大悲の誓願に酬報するが故に眞の報佛土と曰ふ。願とは光明と壽命との願なり。如來の光明は徧く法界を照して餘することなく、壽命は永恒にして究盡あることなくして、常恒不斷に十方衆生を攝取す。衆生の方よりは自己の世界を感じるも、如來は光明の照す處壽命の存する處として眞佛土に非ざる處なし。

又涅槃經に言く、又解脫とは名づけて虚無と曰ふ。虚無は即ち解脫なり。解脫は即是如來なり。如來は即ち是虚無なり。作所作に非ず、乃至眞解脫とは不生不滅なり。是故に解脫は即是如來、不生不滅、不老不死、不破不壞にして、有爲の法に非ず。是義を以ての故に名づけて如來入大涅槃と曰ふ。又解脫とは無上々と名づく、無上々とは即眞解脫なり、解脫とは即是如來なり。若し無上菩提を成ずるを得ば無愛無疑、無愛無疑即眞解脫なり。

衆生の機に對する時は十劫正覺の如來、西方極樂世界に在まして、我等を徹照したまふ。

如來の方より見れば、永恒自存の眞佛如來、即ち盡十方無碍光如來、三界に勝過せる、畢竟して虚空の如く、廣大にして邊際なき處に在ませり。

衆生に應じて、報とは如來の願海に由て果成の土を酬報せり故に報と云ふ。然るに願に眞と假と有り。是を以て復佛土に眞あり假あり。選擇本願の正因に由て眞佛土を成就せり。眞佛とは大經無邊光佛無碍光佛と言へり。又諸佛の中の王、光明中の極尊なりと。眞土とは大經に無量光明土と言へり。或は諸智土と云へり。

今日く、本佛は法爾本佛、報身とは衆生に對する報なり。一々誓願衆生の爲なれば、因果的酬報感の如くなれども、其實、空間に、衆生に對する酬報、常恒に衆生の信念に報酬す。衆生信する時は攝取し、念する時は酬いて靈化す。

無 對

絶對心靈なる如來の身心土。

如來本絶對心靈に在ませば、國土にして即身、身即心。三にして一。三にして三。差別即平等。平等即差別、如來自身には本一體なれば、若し心性なりと觀すれば全體精神態ならざる處なし。また舉體即如來の清淨法身なれば、一切處として摩訶毘盧遮那の靈態に非ざる處なし。寂光淨土は絶對なれば、處として國土ならざるはなし。

問、若し如來身土絶對にして處として靈性ならざるなしと云はば現に吾人各何故に之を感覺することを得ざるや。答て、如來は本來永恒不變の靈態に在ませども衆生は無明の爲に翳せられて自ら之を

知見すること能はず。同じく宇宙なれども、實體と現象と分ちて吾人の感覺する處は現象界にして如來は實體の即ち觀念界に住す。

實體は絶對無限にして規定を離れたる。現象界は相待有限にして相待に規定せらる。吾人が感覺は現象界に相應し、實體は觀念に相應し。吾人の感覺は天然に規定せられ有限にして器械的に感覺するのみ。故に絶對の實體は感覺するに由なし。器械的的感覺機能を假らずして直觀に絶對的觀念に住し、心眼開發する時は、窓を開きて大虛を瞻るが如く、無限の靈性を觀することを得べし。即ち直接に如來の靈光に感觸することを得るは感覺界に非ずして觀念界にあり。さればとて感覺界と觀念界と其體別なるに非ず。如來の靈體の中に在て衆生自ら感ずること能はざるのみ。

心性として如來を觀ぜんか、如來は本絶對眞心即ち一大心靈體にして宇宙に充滿す。

心靈は一切に超絶して而も一切に即せざるなし。

心性、四句を離れ、百非を絶し、清淨本然、不生不滅、常住無壞、徧空間、徧時間、無盡の徳を具して永恒に實存す。

如來一大心靈を法界體性智と曰ひ、大圓鏡智は絶對觀念態にして、宇宙處として如來鏡智の中の寫

象ならざるはなし。如來は、實體の内面より自性自觀的に觀すれば、絶對平等理性ならざるなく、衆生は感覺の差別の假相を見る。如來の自性より觀すれば、物心一如、生佛一體の性を觀す。妙觀察智は、一大心靈の如來には無盡の德を具して、個々衆生の心水澄む處に隨て啓示す。如來の智萬物を造作するに誤ることなく、種々無盡の造作を處として造作せざるなし。吾人は現象界の方面に於てのみ如來一大心靈の萬物造化の妙用を知るのみ。如來の内面的作智は萬物を化作す。

感覺に於ては吾人は無明を隔てて如來の靈體と象と用とを觀するに過ぎず。

如來は嗚呼大なる哉。

心體と寫象と意志的の妙用あるについて、宇宙を精神態と爲して觀じたるなり。

次に身體的に觀する時は之を清淨法身と爲す。宇宙全體即ち如來の靈體なり。清淨法身は即ち體なり。地水火風空識の六大の本體之を法身と名づく。其量無限にして無盡の德を含藏す。六大無碍の靈體之を毘盧遮那と名づく。所謂大日如來心靈の覺體。塵數諸聖は心數の眷屬。依正二報本有の理體を法身と名づけ、毘盧遮那に即ち體に具する所の大智慧即ち一切慧態を報身と名づく。即ち大圓鏡智等の五智は如來の圓滿報身の德として莊嚴す。人間に有する智即寫象の本體なり。絶對法身の寫象即ち

智慧態が圓滿に顯現したるを圓滿報身と名づく。また八萬の相好光明等と照すことの一大靈相の顯現なり。

應身とは絶對意志の活動なり。如來法身の、一切衆生に對して、解脱せしめん靈化の爲の應化に外ならず。本如來意志は處として在らざるなきが故に衆生の念する所に隨て應じて化をなす。三昧定中に映現するは内面に應現して、之が動機となりて善の行動を爲すは、是全く個體に心靈の意志が應現したるに外ならず。若くは信心開發して觀する時は、宇宙萬物の中に如來の聖意顯現せざる處なし。有情非情、草木國土、悉皆成佛なれば、其活動が即ち如來の隨類の應用に外ならず。自觀的に觀すれば宇宙は如來の法身にして同じく報應の三身なり。衆生は煩惱に障られて自ら見ることに能はざるなり。

次に如來を世界態に觀する時は寂光土また一眞法界と名づく、宇宙實體如來の國土にあらざるなし。清淨本然法界に周徧す。其本質非物非心にして物心の一元強いて一眞法界と名づけ又常寂光土と名づく。現象は雜多の感覺世界を現するも、如來は本來常自寂靜にして光明昭然。寂とは世界の實體にして、即ち一眞法界體性堅凝にして清淨本然徧一切處、處として如來の土ならざるなし。照とは智

慧態にして、報身の一切慧と名づくべき徳にして、淨土には唯如如の理此の智となるのみ。虚徹靈明にして十方に昭然。土とは、一切の所依にして又物として之より生ぜざるなきが如く、如來の意志絶對意志は、即ち萬物の休止する處、萬物の發現する處。土は即ち體にして用。體とは萬物の依止する處。宇宙萬物悉く一大一眞法界に依止せざるものなく、また此の勢力によつて動ぜざるものなし。之を土と名づく。常寂光土は是如來の土なり。土即ち如來にして、如來即ち土なり。人已に心開發すれば、理想の中に常寂光土に住して、内鑑○然として如來の土に安立し、如來靈土の中に動き、報命終る時は寂光土に歸す。

如來は、本、身心土即一にして、而も心土と爲る故に、是の絶對なるを無對と爲す。

眞佛土の異名——淨土とは感覺的

一切に超絶せる如來の眞境は不可思議にして相対的規定の思慮に超ゆ。然るに彼の眞佛土は感覺界を超越せる諸の聖者の處にして絶對靈界なり。同一の眞佛土に名稱甚だ多し。感覺的に清淨國土と稱

し、又美天國と云ひ、感情的に極樂又樂園と曰ひ、智力的に無量光明土又智土と云ひ、理知的に常寂光土と名け、故意的意志を超越せるが故に無爲自然界又無爲涅槃界と云ひ、天然的感覺を超越して無明に秘せられたる凡夫の見聞を絶するが故に蜜嚴淨土と名づけ、心靈具德（○○）して、重々無盡の具德を表はして、蓮華藏世界と名づく。

是如來の清淨歡喜智慧不斷の一大靈光が四心四能に對する心象なり。感覺的には淨土と名づくるも天然的感覺に非ず。如來の靈界は感覺的物質にあらずして、至美の感覺的心象にして、三昧定中に清淨國土を觀するは是心象なり。心象至美の境に五妙境界相あり。是現宇宙を離れて遠き彼岸に在るに非ず、客觀に淨穢あるに非ず、自己の心理の無明霧れ心眼開發する時は靈界、處として靈界ならざるはなし。是三昧を修して心眼開發する人の已に證明する處なり。

聖經に衆生は苦惱充滿する世界と見る中に如來は淨土にして常恒安穩にして至美莊嚴の淨土に安住す。また、淨名經にも佛陀は常に七寶莊嚴種々美德顯現の中に在るにも拘らず舍利弗等は己が業識によつて穢惡充滿の世界を見ると云へり。また舍利弗等の感覺する穢惡充滿の中に於て佛陀は衆寶莊嚴の淨土を觀す、即ち識る、淨穢は心象なりと云ふことを。

觀經に、佛陀は自らは常に淨土の中に在ると雖、凡夫は心眼盲いて之を見ること能はざるべきを知り給へば、韋提希に告げ給ふに、汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去ること遠からず。汝今念を繋けて彼國を觀すべし。イダイケ曰く、若し佛滅後の諸の衆生等は濁惡不善にして五苦に逼らる、云何がして、當に阿彌陀佛極樂世界を觀すべし。地觀の想を説いて、此想成する時は極て了々にして閉目開目に極樂を見る。若し三昧を得れば彼國地を見ること了々分明にして具さに説くべからず。

又觀經に如來是法界身、一切衆生心想中に入る。心に佛を想ふ時、是心卽是三十二相、八十隨形好なり。又眞身觀に如來は相好光明及び化佛具さに説くべからず。心眼をして見せしむべしと。

即ち知る淨土は心眼の所觀なり、心眼開く時は處として淨土ならざるなきを證せん。

淨土の莊嚴は、大經に、其佛國土は自然の七寶を合成して地とす。恢廓曠蕩として限極すべからず。悉く相雜廁し轉た相入間せり。光赫焜耀として微妙奇麗なり。清淨莊嚴十方一切世界に超踰せり。衆寶中の精なり。彼國には七寶の樹ありて金の網がかゝり、瑠璃の枝には玉の花金の果あり、互に相映飾して云ふべからず。七寶の池に臨めば八功の水澄て金沙の光徹して水なきが如し。水の中に化天童子遊び遊ぶ邊の樓閣、七寶の光色焜耀せり。金地に青赤の華を散し、空中常に天籟を聞く、

等、一切の萬物嚴淨光麗に形と色殊に勝れて妙を極め美を盡して能く稱量することなし。たとひ天眼を得とも見極むこと能はず。また其麗しさ淨かにして、あらゆる世界すべての物の映現することは、たとへば明鏡に其面かげを寫し見るが如しと。また地より上虚空に至るまでの金殿玉樓、寶○寶閣よりすべての萬物に於て皆無量の雜寶百千種の香を以て共に合成し、その麗しさ美妙にてし此の感覺界の物の比にあらず。馥郁たる妙なる香にて普く世界に薰する等。

斯の如きの至美の妙境は如來一大心靈の感覺心象にして粗劣なる物的現象に非ず。

藕益禪師曰く寂光若し勝妙の五塵無くんば何ぞ夫れ偏眞に異ならん。パウルゼン曰く美天國の至美の莊嚴は是靈界の心象なり現經驗界の萬物に於ても悉く吾人感覺の現象なり。此は龜澁なる感覺の現象にして彼は靈化の感覺現象なり。清淨國土とは靈界の感覺的心象なることを明す。

極樂とは感情的

清淨土とまた極樂とは同體の別名にして彼は感覺的に名づけ、此は感情によりて名づけたるに外な

らず。彼靈界は生理規定を脱したる眞理現象にしてすべての相待的また天然の生理規定の身心の苦憂あることなし。更に一大心靈即ち如來靈界は本無爲自然の界にして自然の妙樂あり。常住不變、自然の靈福自在無碍の故に。

感情なるものは自己の情に適すれば歎び安ければ樂し、然るに靈界は眞理に隨順し法性に稱ふが故に安樂なり。

經に其土の相を説て其衆奇妙にして道場超絶し國泥洹の如くして等双なからむ。十方より來生せんもの心悅清淨にして已に我國に到らば快樂安穩ならしめん。また國中の人天受くる所の快樂漏盡比丘の如くなり。其佛の世界を名づけて安樂と云ふ。

靈界は常樂我淨の四徳を以て莊嚴す。彼には天然相待生理規定の幸福主義肉慾の爲の飢餓の苦なく、彼は眞理に稱ふが故に常住にして轉變なく、天然規定に縛せられざるもの、心靈常住不變なり。故に心に變易なく老死無常の爲に惱まされず。常住不變の心靈一大心靈と合するが故に、心靈物と相應じ心物に逆ふことなきが故不變なり、常住なり、純粹なり。心靈には如何なる物も其心を動かす能はず、故に心靈は安穩なり常住不變なり。世間無常のさま、朝に比翼のちぎり夕に別離の悲しみあ

り、今日の樂明日の苦悶となるあり、歡樂究まつて愁傷多し。心を靈界に遊ぶ時は、彼は無爲の都の春永く、畢竟逍遙して、有無を離れ、大悲心に薰じて法界に遊び分身利物等しく殊なることなし。

經に靈界歡喜の心象を説いて、彼に黄金の池あり、金の砂徹照し、池の上に種々の樹あり、花葉垂れ布きて香氣普く薰ず、雜色の光り麗しうして水上に彌覆せり。諸の菩薩等が寶の池に入りて意に水をして足を淨めしめんと欲せば足を淨め、身を濯がしめんと欲せば身にそそぐ。調和冷煖にして自然に意に隨て神を開き體を悦ばしめ心垢を蕩除す。清明激潔にして淨きこと形なきが如し。寶沙映徹して深として照らさずと云ふことなし。微のなみ廻り流れて轉た相ひ灌注す。安詳として徐く逝いて遅からず、波は無量自然の妙聲を揚ぐ。其の所應に隨ひて聞かざるものなし。或は佛の聲を聞き或は法の聲乃至諸の妙なる法の聲を發し、其の所聞に稱て歡喜無量なり。清淨にしてまた幸福慾を離れ眞理に隨順ひ、すべての苦難の名だにあるなし、自然快樂の音のみ。故に安樂と名づく。

又彼の聖者等は、眞理に稱ふ清らけき身、もろもろの音聲神通すべての功德を具足し、居る處の宮殿、衣服飲食等の莊嚴の具自然にして、若し食せんと欲せば七寶の盃器自然に前にあり、金銀寶石等の盃器が意に隨て至り、百味の飲食自然に盈滿す。是の如きの食は色を見香を嗅ぎ意に食せりと思へ

ば自ら飽くに至る。實に身は心と共に靈にして味に着せず、事已れば化して去り、時至らば亦現す。彼は清淨にまた安穩にして微妙なる快樂に靈福に充たされたり。靈界は無爲泥洹なればなり。彼の諸の聖者等は、智慧高明に神通洞かに達し、咸同じく一類にして形異狀なく、唯經驗世界に準じて天また人と名づくべく、其實は相好色身靈態にして世に超て希有なり。容色微妙にして、天にあらず人に非ず、自然虛無の身（靈神）無極の體なりと

晨に散りしく花をひろいて遙かに他方十萬億の佛にたむけ、還た無量百千三昧をうる營ばかり、又神通に乗じて虚空會に登れば、寶殿身にしたがひて空中に飛ぶ。雲路の徘徊、風情きはまりがたし。花雲たなびきてかけはしとなれば聖衆袖を列らねてわたり、香風吹きて樂をなせば飛天袂を翻して舞ふ。面々に通を飛して遊戲快樂するありさま、とりどりに。妙なり。

相待的生滅變易を超えて靈界に入る時は、常住不變にして、萬物に靈應して心靈には逆ふものあるなきが故に、自然に歡喜あり。法身自受用の法樂は宇宙に充ちて唯靈福のみ。故に淨國は唯靈福と光榮のみ。無碍解脫にして、心靈眞我にして、法界として、自己ならざるはなし。法界の重々無盡の靈福に、常樂我淨四德圓滿、宇宙は此の四德を以て充滿せり。

斯の妙味を感じんと欲せば自己を捨て主我幸福主義を避けて心靈を開きて如來の一大心靈界に遊ぶべし。ここに遊ばんと欲せば佛陀の三昧に入りて己を捨て如來を念すべし。凝神一にして竟に靈界に入ることを得べし。如來に投合したる心には常に靈福にして歡喜と安穩と光榮のみ。自己をすてて眞我に入るが故に、天然規定を脱して心靈は無碍自在なり。心は清く深く玲瓏照白にして云ふ可からず。こは心の窓を開きて絶對の心靈の靈福即ち常樂我常の靈性が自己の窓より窺はれたるに過ぎず。一大心靈の即ち如來の靈性歡喜態が個人の心象に現する時は歡喜光の感情的心象の下に説明するが如し。歡喜的心象全體とする時は即ち極樂世界と名づく。

理智に約して常寂光土また智土と名づく

先に靈界を感情に約して安樂世界と名づけて靈性を説明せり。同じく靈界を理性と智とに表明せば寂光土と名づく。

常寂とは、如來一大靈界は絶對無限にして、本自常寂にして不生不滅、永恒自存の心靈態にして、

虚徹靈明、其體性は純粹至精の理性にして、實は時間を超え、本自常然、是萬物の本體にして又宇宙の實體なり。甚深の理ここに至つて盡き、萬物の源ここに至つて究まる。絶對理性及一切智慧のみあつて昭然たり。之を寂光土と名づく。

全宇宙は、自體より觀すれば絶對靈性。如來は常に寂光土に在ます。心靈開發して（觀れば）、宇宙全體として眞理の靈性大智慧の光明あるのみ。個人の靈性と智慧とは此の分身のみ。絶對理智、三際當念に、十方圓融、非空、非有、非自、非佗、無去、無來、不生、不滅。

吾人心靈に、一切の感覺及び感情を抽捨し、純粹靈性に智性のみを以て、佗の一切の心象を去る時は、本自寂光となり、空間に徧し時間に徧し、虚徹靈明、不生不滅、唯靈性あるのみ。これ常寂光土を窓より窺ひたるなり。如是にして絶對なるは是理智の靈界なり。

如來の靈界を無量光明土と名づく、また諸智土と曰ひ、又無邊光。諸佛の中の王也、光明中の極尊なり。盡十方無碍光等は是如來佛土を智慧態に表明したるものなり。

意志的に涅槃界と曰ふ

靈界は一大心靈にして、又一切萬物の靈性の源にして、又歸趣する所。靈界を、意志的に、無爲涅槃界と名づくる所以は、天然的生理規定の一切の意志は各々自己の目的に隨て活動す。夫れ自己の目的は眞理に非ず、顛倒的生理に順するが故に。自己の目的を捨て一大目的即ち如來の靈性に協ふ時は、終局目的に一大心性に歸趣することを得。之個人を捨て絶對の靈性即ち如來に歸入せし時即ち涅槃に入る。涅槃は一大心靈なれば、本來不生不滅、天然意志の轉變定まりなきに同じからず。靈性と致一し靈化する時は、無始不生不滅の靈と致一す。靈界は作意識意思を超えて自然無爲なり。而して之を消極的には、絶對靈性是不生不滅非空間非時間一切の動作を超越して無爲涅槃界、言語同斷、心行處滅、名づくべからず強て名づけて無爲涅槃界と名づく。

靈性は一切をして休息を與へんが爲めに、一方には、寂靜涅槃、無爲の都土を實體の中に構へたりしも、一方には、永恒不斷に絶對心靈が一切の世界萬物に活動の力を與へて生活せしめ、又一切をし

て終局目的に攝取する處の勢力また此の靈能の力に外ならず。故に涅槃を無住涅槃と名づく。涅槃の體は個人に非ず絶對なり。絶對靈性が一切の個人を顯現して活動をなす、その靈性は宇宙に周遍す。

如來の靈性涅槃は、内面には、寂靜無爲の○○を以て充しめ、一方には任運無爲に活動す。十方一切聖賢等の靈的活動は其本一大靈能の力の個人に現れたるに外ならず。

彼は天鼓の鳴らさずして自ら鼓するが如く無爲任運に動くなり。天然の現象には天然界一切の運動天體無數の星辰より地球萬物の活動は○○如來一大靈能を離れたるものに非ざるも、いまは一切を終局目的に導くものの方をいふ。

如來無住涅槃とは是なり。極樂即ち一大靈界は單に消極の歸趣なる無爲の樂都たるのみにあらず、一切の心靈的活動も悉く如來の一大靈能の力による故に、楞伽に十方一切の法報應身及變化身等は無量壽極樂國より生ずと。極樂一大靈性は一切の歸趣の理性にしてまた一切活動の原動なり。されば已に如來に攝せらるる上は、精神生活に於て、内面には常に如來の無爲涅槃の靈界に逍遙し、一方には如來の聖意を現ぜんが爲に活動せざる可からず。これ無住涅槃の形式なり。

神秘的に蜜嚴世界と名づく

一大靈界、本來宇宙は、是毘盧遮那如來蓮華藏世界に住するのみ。然るを衆生無始已來無明に秘せられて自ら之を識る事能はず。心眼開發する時は宇宙として如來身ならざるはなし。全體を以て毘盧遮那及び蜜嚴淨土たるのみに非ず、一切の個々は悉く一大靈性の顯現なれば、事實より云はば、人々悉く大日の全身、處として蜜嚴淨土ならざるはなし。個々物々、各自の識不識に拘らず、本自法然に大日如來五智の四佛及び十六菩薩三十七尊一千七百乃至微塵の眷屬を攝して安住す。故に十方無盡の如來を觀ぜんと欲せば、自己の心蓮を開きて一切の如來の己に安置せるを觀すべし。蜜嚴世界を觀ぜんと欲せば自己の無明の翳を除くべし。蜜嚴淨土法爾として顯然、内面は己に眞言の下に於て明しぬ。

何故に極樂即ち靈界を蜜嚴世界と號するや。答て、衆生本其淨土に居ながら之を知見すること能はざるに諸佛は常に蜜嚴世界に居す。同じ中に在て衆生は猶自ら穢惡の麁劣の世界を知る。

金剛頂經に、金剛界遍照如來、五智所成四種法身をもて、本有金剛界金剛心殿の中に於て、自性所成の眷屬乃至微細法身秘密心地の十地を超過せる身語心の金剛等と與なりきと。諸の菩薩能く見ることなく但に覺知せず。

今日く、吾人の心靈もと絶對心靈、即ち本同一の靈性、如來の個體顯現なれば自己の心靈開發する時は、觀念界無限にして其體法界體性即ち宇宙と一體なり。己心の伏藏開く時は、四智及三種法身乃至微塵の佛刹も、自觀に寫象すると、一切佛刹悉く心窓の開く時に顯現す。自己心靈即ち一大心靈の個體なれば、自己に一切を攝する如く、一切の個々法爾として其德を具す。衆生無明に翳ぜられ自ら知らず故に蜜嚴世界と曰ふ。

法華には、我三界の如くに三界を見ずと、觀經には、佛の曰く韋提希よ汝は是凡夫心想羸劣にして如來の境界を見ること能はず。然れども阿彌陀佛此を去ること遠からずと。但し自己の心眼の一翳を隔つるのみ。心眼の膜を除く時は宇宙本是極樂世界なるを觀せん。天然の感覺に對して蜜嚴世界と名づく。

譬喩的に蓮華藏世界と名づく

宇宙靈相は靈界を譬喩的に蓮華藏世界と名づく。蓮華藏世界と云ふも外ならず宇宙の實體即蓮華藏界なり。天然の人は無明に翳せられて之を知らず。宇宙の萬有は一大心靈の分身の個々なれば、同一理性の差別的顯現なれば、一切の個々は相互に關聯して、孤立なるものあらざれば、一を舉ぐれば一切を攝す。一個の塵に一切世界の塵々を收む。一人に一切を容る。人の腦裏に十方無量の世界を容るも相碍げず。一塵に然かる如く一切の塵々亦然り。重々無盡にして法爾として理爾るなり。

故に達人は一塵の中に於て無量の世界を觀る。宇宙全體蓮華藏世界にして、十佛の自境界なれば、一切の塵々も亦蓮華藏世界にして十佛果海中に在て法輪を轉ず。甚深不可思議。宇宙無限の故に一塵も無限なり。法界に無盡の德を有する故に一塵また無盡の德を具す。法界の有らゆる物をして一塵に容れざるなし。一塵を捨つる時は法界の事境界あることなし。一塵如來の靈界なれば一切の塵々悉く蓮華藏世界ならざるなし。塵中に於て眞佛土を觀すること能はざるものには、宇宙を盡すとも眞佛土

を發見すること能はず。前に已に華嚴家の中に於て略して説きぬ。

如來眞佛土甚深々々微妙、凡夫の管見を以て測るべからず。古德或は立宗判教の上に於て四土を立て、安養は同居土とし、また寂光と極樂とは階級的に分つあり。そは感覺感情をおとして理性と智とを尊むが爲なり。また古德各立宗判教の便宜の説にして事實然るといふに非ず。

古德凡聖同居土等の四土を立て安養と寂光とは階級的に格別なるやうに説き判じたるは隨宜の方便のみ。其實同じく如來の靈界、宇宙の眞相にして、心靈開發したる人の歸する所なり、又安住する所なり。感覺的に淨土また美天國と稱し、感情的に極樂また安養と呼び、また睿智世界最高德と最靈福と一致する所、また寂光土と云ひ、蜜嚴世界と云ひ又蓮華藏世界と云ふ。

靈界は心象にして、至美玲瓏、昭曜として十方を照し、微妙至妙至美の感覺的心象なり。之を淨土と名づく。

靈界は眞に稱ひ毫も違情することなく、自然の靈福常住不變、無碍自在、清淨の故に、唯靈福と光榮とあるのみ。感情的に之を極樂界と名づく。

至眞眞理の靈界、常自寂靜にして、虛徹靈明、至理に眞智の光明あるのみなれば、寂光土と稱す。

又睿智世界と名づく。是智力的に名づく。

彼は一切の行動の終局の歸趣する所至善の究竟する處、善の行爲はここに至て圓滿に達し一切の善の行爲は是より發動するが故に、無爲涅槃界と名づく。無住涅槃なり、是れ意志的に名づく。

如來法身自證の境界は萬德具備の莊嚴、無明に秘せられて感覺界に知見すること能はざれば蜜嚴世界と名づく。

心靈開發するものの住する處、重々無盡、具德の理を盡したるを、譬喩的に、蓮華藏世界と名づく。

其他種々の名詞あるも、同じく一大靈界の即ち眞佛土の別名にして其體別なるに非ず。此如來無對光の身土を種々の方面より觀察して其德性を詮表せんが爲に名づけたるに外ならず。

如來は無對にして、一切の相待的規定を超絶する絶對無規定にして、而も一切の相待規定の萬物の歸趣する所。方處を以て論すれば、遠き彼岸を指すに非ず、絶對の靈界眞佛身土。衆生の無明盡くる處何處に於ても實現すべし。

三世一切の聖賢ここに到達して初めて正覺を成ず。故にこれ一切の歸趣する處。十方世界の諸佛こ

ここに到れば唯一にして不二、然れども衆生を度せんが爲にまた十方一切世界に應化の身を現じて八相化相を示す。

天然界に現じて感覺的現象の中に化儀を示すを應身と名づけ、觀念界即心靈界の教主として、衆生の觀念内面に於て、常住無窮に、不可思議の身を以て衆生を度すを法佛と名づく。一切の至善の行爲の終局に觀見するを報身佛と名づく。一切斯如來の無對、最終の歸趣にして、同時に、一切法報應及び變化の聖賢の發現する處なるが故に、楞伽に、十方一切法報應化身等は皆無量壽極樂界中より出づと。

絶對無限

阿彌の本體は、絶對無限、一體に無量の義を具備す、法報應三身を統一し、法般解三徳を合一し、心佛衆生是三無差別の性。

理智不二三大を總ぶ

阿彌佛隨機方便には十方諸佛の一佛にして、相待的に東に待して西方と云ひ穢土に待して淨土と云ふ。他佛に簡んで阿彌佛と爲す。是事に隨ひ機に隨つて説くのみ。阿彌の實體は、楞伽に、所謂十方諸刹土衆生菩薩中所有法報佛及變化皆無量壽極樂中出とは、是深秘の眞理の阿彌の本體、絶對精神態にして相待的に非ず。

元來佛教理論には、佛體即ち宗教客體に學語を以て種々の名稱を用ひ、法と佛とを分別して、法は

無限の法體として、法體の用に報應の二身を佛とするは起信の如し。そは釋尊の應化即ち人格を佛とする標準より出たる說にして、圓滿の宗教としては本意に非ず。客體を稱するに眞如法性第一義諦如來藏性等其名稱甚だ多し。絕對眞心即ち大乘佛教の客體の詮表なるに外ならず。絕對の本體を命するに種々の名詞あり。楞嚴に如來藏性妙眞如性。名詞が本體を詮表するに最も適切なり。種々異名には、眞心、自性、眞際、菩提妙性、實相、靈智、法身等の名、或は毘盧遮那遍一切處等有りて數ふべからず。

今宗教の客體を詮表するに最も完全圓滿に彰はすには、阿彌陀の號を以てするが、是圓滿に發達したる宗教意識の客體とする名稱なり。宗教に阿彌陀と名づくと如來藏性妙眞如性とは同體の異名にして、甲は宗教により乙は學語に名づけたるに外ならず。今は宗教の語をもつて阿彌の名を用ふ。起信には眞如と名づく。宗教客體は絕對にして、世界一切因果の根底とし、萬物を統攝し、一切の終局の歸趣する極致にあらざるよりは、一切の依屬とするに堪へず。

若し客體にして、自ら全法界の最終の根底とし歸趣する所にあらずして、自らは相待規定の、所謂る依佗起性にして、絕對眞如の客體の屬生物として、一佛土を構ひて衆生を濟度すといふが如きは、

自ら相待規定を免かれず。絶対に依屬するに非ずや。自ら他に依屬せるものにして、佗の依屬となる能はず、そは唯紹介者たるに過ぎず。何ぞ宗教客體とならん。

今宗教客體に要求する處の阿彌は、楞伽に所謂る十方佛土乃至一切無量の法報應等の一大本源にして、一切法界の最終の實體にして、十方一切の諸佛も一切衆生も國土も一として、之に統攝せられざるものなく、十方法界無數菩薩及衆生等の最終の歸趣する處にして、最圓滿なる宗教客體たり。但し宗教の學說に拘らず單に信仰の方法便宜として、事相の客體を立て、是心機開展の必要に出たる如きは、今の論する處にあらず。理と事とは相待て離れたるに非ず。事相家の宗教によつて、業事成辨するが如きは、其の宗教關係の中に理法のある有つて、而して業事により成辨するのみ。例ば未だ食物の化學的原理をもわきまえず、消化の理も識らざるものも、食すれば自ら榮養作用あるが如し。彼れ自ら識らざるも其理なきに非ざるが如し。

阿彌一體の三義

絕對阿彌の本質は絕對精神態にして無限、所謂一眞法界法門の體。絕對唯一の本體に三義を具す。曰く、法身般若解脱となり。一體の法身に二德は屬性なり。二德具すれども本法身に屬す。二德具するが故に縦に非ず。法身に屬するが故に横に非ず。一に非ず、異に非ず。

絕對精神、絕對の故に非空間、非時間、非物質、また遍時間、遍空間、遍一切、遍活動、一切自中
存在、本體絕對。

法身と般若と解脱とは不横不豎、不一不異、法身を擧げば必ず般若と解脱を具せり。本、不即不離の故に三德は一體の三義。法身大にして統べざる處なし。般若大にして處として照さざるなく、解脱大にして處として融せざるなく、法身は體にて般若は象、解脱は活動にして、本然の自性、永劫一切に含蓄して、循業隨縁の發現なり。

三 身 一 體

自體相は絕對自性、畢竟常恒本自無邊功德を具備す。大智慧光明の義、遍照法界の義、眞實識知の

義等、無邊聖德を如來藏亦法身と名づく。阿彌即ち眞如自體相とは、從本已來、性自滿足、處染不垢、修治不淨、在聖體而も處凡夫不滅。信論に眞如の自體有二、智慧光明義故、眞實識知義、知〇の故、自性清淨心の故、乃至一切恒沙功德不思議佛法を具足し、満足して少く所なき義の故に法身如來藏と名く。自然に不思議の業用あつて、眞如に等しく一切處に遍し無作自然、如來唯法身智相第一義諦にして、世諦の境界あることなし。施作を離るれども、但だ衆生に益を得せしめんが爲に、自ら妙用をなし、凡夫二乘に對しては應身を示現し、種々の色相を現し、菩薩の爲には報身無量の相好依正二報莊嚴を示現して、無窮にして其所應に隨つて現す。如來法身、本、色相を離れたるも、法身是色の體なるが故に能く色を現す。本來、色心不二なるが故に、法身一切處に遍するが故に、所現の身色も衆生の心に隨ひ業に循て發現す。眞如自在の用の義なるが故に。

眞如是れ阿彌の法身。法身一切處に遍して、衆生の見聞に隨つて報應二身及變化身を示現して、能感の機、十方所有刹土に能感の機ありて、緣熟する時は一時に示現して邊あることなし。故に十方法報應悉く阿彌より出づ。機に隨ひ用に隨て、三身を發現す。本は一なり、絶對眞心なり。

三法に約して絶對眞心態を釋す

心佛衆生是三無差別と。無差別性、即絶對阿彌の性なり。此性、迷に在るも滅せず、悟に在るも増さず。性より見れば無差別、用より見れば三面歴然。心法とは阿彌の本質絶對、精神分齊なく、亦方隅なく、初後なく、並に時劫なし。横に遍く堅に窮め、絶對不可思議。一切世界因果心に個々體と爲る。心性不可思議衆生と顯現するも、心性は不變、心性は不變にして、即ち十界に隨縁の身心土を顯す。一切の顯動態に在て、而も其性を見ることなし。性徳有相に非ず、亦無相に非ず、見るべからず、見べからざるも性なきに非ず、有に非ず、無に非ず、一に非ず、異に非ず、四句を絶し百非を非す。

此の心性に迷ふ故に六趣に迷没す。諸佛は之を證して極果とす。菩薩之を悟入して其因とす。而も心體は因果に非ず、是十界迷悟の本源、生死涅槃の本體名づくべからず強て名づけて心法と云ふ。

佛法、絶對阿彌、本來迷悟なく、迷悟生佛は是相待の假名、生死涅槃何ぞ絶對にあらん。本煩惱な

し、何ぞ菩提あらん。絶對阿彌また不可思議に、積極の方面に、本來、阿彌の自中に在て、迷悟生佛、生死涅槃の相を發現す。煩惱を轉じて菩提となし、生死に即して涅槃を現す。茲に於て佛法顯はる。

佛法無量の義あり、今事理の二義に約して佛法を顯さん。

事に約して阿彌を示さば、因あり、果あり、總あり、別あり、絶對本因果なきに因果を示し、因には法藏菩薩の願行を示現して、阿彌の性徳の無限の妙用あつて一切を攝取度脱の性能なることを示す。果には塵沙の相好光明、光明遍照、法界衆生攝取不捨の妙用あつて、常恒に一切を展開し、衆生を度脱する性能なるを表す。是の如く若しは因分、若は果滿の妙相、十方法界一切の處に周遍して、衆生の心に隨ひ念に應じて邊齊あることなし。總とは總じては十方無量の法界に種々の名種々の相好等を以て衆生を攝度す。悉く阿彌三身の所現にして無量の相好を現したるに外ならず。三世十方名字の不同年記の異種あるも、其本體を尅せばあみの所現、故に總と云ふ。別とは別にして西方にあみだ佛あり等。また三十六、阿彌陀佛在り等。大論に同名の無量の阿彌在ることを明す。阿彌の別名悉く絶對阿彌の所現なり。事に約して無量の依正二報の莊嚴等なり。

また大日、阿閼、阿彌陀、寶勝、釋迦等の五智等も。悉く絶対阿彌の理智を表明したるに過ぎず。

或は華嚴事々無碍法界に、毘盧十身互用無碍、或は自身以て衆生身、國土身、業報身、聲聞身、緣覺身、菩薩身、如來身、智身、法身、虚空身、如此の十身隨華身攝餘の身故に、入一鏡像觀等も絶対阿彌の事々無碍の妙用のみ。

絶対に因果とし、圓融無碍因該果海、果徹因源、一方には永恒不斷に菩薩の身を現して度生化物の用を施し、内面には常恒に重々無盡の蓮華藏界に毘盧遮那ありて塵沙の相好光明等具さに説べからず。阿彌事々無碍の妙用のみ。理に約して釋せば、絶対眞心本自離即離非是非即遮照同時不可思議隨緣の故に十界の身心土を現し、不變の故に十界即絕對眞心不度即隨緣の故に俱即なり。隨緣即不變の故に一切俱非なり。隨緣の故に十界迷悟染淨の諸緣に隨ふ。不變の故に十界迷悟染淨の諸法悉く當體、一切俱非なるを空の義、一切俱即を不空とす。空と不空と眞心の義のみ。盡十方國土衆生及法報應變化身是阿彌より出づと。一切の句々塵沙の萬有も悉く一理より根底より出て一理に歸趣す。其一の性即ち阿彌なり。理を離れて事相法界あることなし。また事相を離れて理性の妙用を顯はすことなし。約理にせば、法身般若解脫の三法にして、圓妙の三德は理空間を超え時間を絶し縱横を非す。

法身大處として、統せざるなく般若大處として照さざるなく、解脫大處として融せざるなく、三徳體の二屬性、即ち阿彌の一切慧一切能に外ならず。諸佛は此理法に軌て已に成佛し、菩薩は此法に軌て當に成佛す。一切衆生は此の理に違ふが故に沈淪す。

衆生法（楞嚴の義）

絶對本體、本來不變なるも、また染の縁に隨つて、九界衆生界も顯現す。含識、本有迷悟本性を失はず。衆生は佛の三徳に迷ふて三惑と爲す。一惑障、見思、塵沙、無明の惑三菩提を障ふ。二業障、善惡不動諸有漏業三解脫を障ふ。三報障、同屬分明方便變易の報三涅槃を障ふ。三惑即三菩提なり、菩提の性を離れて別に惑なきが故に。目を離れて瞠なきが如し。三業即三解脫なり、解脫の性を離れて別に業なきが故に。手を離れて拳なきが如し。三〇生死即涅槃なり、涅槃の性を離れて生死無が故に。空を離れて華なきが如し。故に惑即涅槃、業即解脫。苦即法身。又曰、生死即涅槃、煩惱即菩提なり。菩提は是究竟智徳、菩提と解脫と涅槃とを照す。涅槃は是斷徳、三惑を斷じ三生死を斷す。菩

提は是如智、涅槃は如の理、理智不二を法身と名づく。生滅を妄と名づく。妄と滅と〇と名づく、是如來無上菩提及大涅槃轉依の〇と稱す。喩は水の氷と成が如し。夫水と氷と濕性相同じ。

○流異れり、謂く、九法界は染縁に隨ひ菩提を轉じて煩惱となし涅槃を轉じて生死と爲す。喩は水の氷と成が如し。流〇の相と濕性とは失はず。然れども亦幾と辨じ難きが如し、然も濕性は在らずんばあらず、濕性已に在らば則流〇の性亦失はず。○の縁より奪て但正因と名づく。諸佛は淨縁に隨ひ煩惱を轉じて菩提と爲し生死を轉じて涅槃と爲。喩ば水凍つて氷と成が如し。九界は水の如く佛界は水の如し。絶對阿彌の中に染淨隨縁の衆生と及び佛界となり。

衆生法また心法、心外別に衆生有るに非ず、亦佛法、佛法の外に衆生有るに非ず、衆生法の外に佛法有るに非ず。一衆生法に一切衆生法と佛法と心法とを見る。一佛法に一切佛法衆生法を見る。心佛衆生三無差別。即ち絶對阿彌の三方面、一體と三法とは非一非異、絶對阿彌を離れて三法有るに非ず、三法を離れて絶對阿彌に非ず。

絶對圓融無碍

法身の體性、華嚴に十種の體性を明す。曰く、法身亦自性身と名づく。一、佛陀○唯所照眞如清淨法界爲性餘四智並屬報化。二或は約智無性、攝論無量碍智爲法身。三、亦智亦境。攝論に唯如々智獨存爲法身。四境智雙義如來法身非智非境。七通攝五分及悲願等法行功德皆是此法身ならざるはなし。攝論、三十二相等皆入法界身。九通攝一切三世間の故に衆生及器界佛に非るなし。故に一大法身具十佛故三身等並に此中に有智正覺に攝するが故に。十總前九爲一總句。是謂如來無碍自在法身の義。

今日絶對阿彌の法身是なり。

此法身の業因に四種、一、此理法身は諸の觀智の爲に開覺せらる。經に、法身說法授與義の故に。今日く一切衆生信機開展せば、衆生含蓄せる法身の業用に外ならず。二、此に依て報化を起し生を利し勝業因を起す故に。三、或は○等に依て密に攝化する故に、四に、諸塵道無○等處に遍して重々自在無碍業用なり。十方一切或は顯動若は本然、一切絶對阿彌の業用に非ざるはなし。

心境圓融無碍

心境秘密圓融觀 華嚴妄盡還源

心と言は謂く無碍心。諸佛之を證して以て法身と成し。境とは謂く無碍境。諸佛之を證して以て淨土と成す。如來の法身も所依の淨土も圓融無碍。或は身に刹土を現じ、經に一毛孔中無量刹各有四洲四大海須彌鐵圍亦復然悉現其中無迫隘。或は刹に又佛身を現す。經に華藏世界所有塵一々塵中佛皆入起神變毘盧遮那法。

阿彌絕對本質は圓融無碍にして、衆生は唯この經驗界のみを見る。絕對無碍の本質の内客には無盡の徳を含藏するが故に、若し宗教心理の啓示即ち三昧に入て觀する時は、盡空間に或は佛の無量相好光明普く十方を照すを觀ず。或七寶莊嚴の依界を見。處を轉ぜず、心に隨て種々無量の境界を觀ぜんに無碍なり。物質に無碍圓融を求むべからざるも、心理即ち三昧中には圓融無碍の理あることを證明すべし。

一切の處とし一切の時として啓示の中の阿彌身心顯現せざるはなし。故に知る阿彌の本質及び無盡の相好等の屬性も等しく一切處に周遍して實在せざることなく、その本質に適したる精神の三昧に依て觀取することを得ると。事理圓融、本質と顯動とは無礙なり。

吾人は經驗の顯動世界中に、超天然なる絕對真心質と無礙にして、天然の心機には感覺的に經驗世界を見ると同時に、三昧には阿彌の内容に入て依正二報の妙色莊嚴を觀するに無礙なり。

本體本絕對無限なれば此宇宙の外に佛及淨土を求むべからず。自己の心を轉じて阿彌の内容に入らば一切處として妙色ならざるなし、時として淨土ならざることなきを證せん。佛陀の曰く我三界の如くに三界を見ず。謂ば、我は世間の人の感覺世界のみを見ずして觀念世界に常に淨土常に寂光を見るなり。また衆生は劫盡で大火に燒かるゝも我此土は安穩にして天人常に充滿せり。園林諸堂閣種々の寶もて莊嚴せり。圓融無礙の華藏世界、この經驗界の本質内容に求めずして何の處にか在らん。幼稚宗教意識、天然に佛陀及淨土を求むるの誤を除きて、正理に求むる時は必ず觀することを得ん。

或は常に寂光土又は華藏世界は絕對あみ内容の多方面なりと識るべし。圓融無礙の身心土に就て絕對たることを説きぬ。

絶對（性修不二）

絶對阿彌の本質理體は本有にして修成にあらず。本然清淨にして發現して始めて成せしに非ず。是諸佛の本地萬法の極致。本然の阿彌は内容には本自常寂光にして同時に妙色莊嚴なり。客體の本體には本有の外に成不成なし。顯動體の世界的方面の相待的因果の規律なる衆生の爲に、暫く客體の阿彌も果成の如來と説けば、隨機の説にして、本來客體は本有、また因果規定の相待に非ずして、絶對的精神態に無盡の妙色莊嚴は衆生の方面より見聞すべきのみ。絶對阿彌は本然の客體、衆生の方面より、轉依して寂光全圓滿に解脫靈化したる時は、絶對阿彌内容に實在的に歸入し已んぬ。之を大涅槃亦無上正覺を得と爲。法身とは一切衆生の根底また本體なり。

報身とは、本體より出で、佛性具有せる衆生の、報身なる終局目的に向ふべき、客體の恩寵に依りて、心機發展し、天然の主我より絶對阿彌の中に轉依して、眞我の中の我とし、阿彌の個體として、終局目的に協力して、神的行動し、理想的に解脫し、而して依身命終て實在的に絶對阿彌の報身に歸

入す。報身報土とは一切衆生の終局に歸入すべき内容にして、信仰の因業より其果報として、證入すべき故に報土とす。是また衆生に對する名目にして、絶對阿彌因果規定の相待物にあらず。絶對自身の阿彌に因果あらんや。報身とは、衆生また一切衆生に終局目的の光を與へんが爲め、絶對阿彌の不可思議の妙用より發現したる報身なりと爲す。本體相待因果に非ざるも、衆生の爲に因果を示し、因には法藏として無限の大願を示し、果には十劫正覺の報身なりと現す。

是また機に對するの妙用にして、本來本有の法身に自然の妙用なり。天台師の釋によるも、隨機方便の別教にては、法身は本有にして、報身は修より成し、應身は起用なりと。隨自眞實の圓教にては、三身全く是性具、亦復全是修より顯現す。性と修と不二なるは圓教の如來なり。實は楞伽に説が如く、一切法報應は阿彌より發現してまた阿彌に歸入す。一切衆生もまた爾り。客體に因と果位とを分ち報身の如來を説けるは、隨機の説のみとしるは能く發達したる宗教意識に適すべし。

經典と實驗

世界一切の人類を救済し攝取する大宗教は人類の起原と共に起原したるものならん。然して生物の進化と共に人の精神生活の宗教史に於てもまた人文の歴史と共に宗教心も及び教理も幼稚の宗教より漸次に高等なる宗教に進化したることは否認すべからず。

我佛教も亦印度古代の宗教より系統的に進み來りし系統と階級によらずして發○したるものに非ず。

佛陀が阿羅々等の數論師につきて學びたるもそれらの宗教は非想等の客觀に目的を置いて客體が主觀的なるか客觀的なるかまた確定し難きが如し。

予は淨土教は大乘經として佛說なりや非佛說なりやまた須磨提極樂は去此不遠また西方彼岸何れなりやも關しない。

(唯予は斯の金文が宗教的經驗の上に自己靈感として)

斯經が何の時代何の人によりて編せられたるか、また原始佛教と何なる關係を有するかの議論にあらず。

歴史と若しくは宗義學上の問題にあらず。人生問題に對し、宗教上の實驗に對して、二千有餘年の今日、靈光灼爛として吾人の心靈に輝き照す心靈の實驗に於て毫も異ることなきが如きに至つては、吾人は此眞理を疑はんと欲すと雖能はざるなり。

宗教的靈的實驗の外に前後に列する所の抒事詩の如き神話の如き（ ）の如きは敢て深意を以て之を解せず。然るに世の宗教を説くもの全く自己の內的靈驗に訴へず唯に言語文字の上にのみ。

若しは聖善導聖法然の宗教的内容の如きは斯の教祖の靈的内容と毫も異ることなきにあらん。

若し諸君は自己の信仰的内容を此金文の間に如何に一致するかまた相違の在るかを比較し而して自己の心情と靈性とに相應するかを判斷すべし。若しかく聖經を如實に取扱ふに非ざれば聖典何の龜鑑とならん。